

その破綻に至る複雑なプロセスを、きわめて具体的に描写している。

第5章：「方格プランをめぐるさまざまな対応」は、前章の続章ともいべき部分で、同様の研究目的のもとに、ヴァン・ディーメンズ・ランド、西オーストラリア、ポート・フィリップ地区（ヴィクトリア）の各事例について、方格プランの導入または実施の経過や実体に関する検討を試みている。その結果、方格プラン導入に対する対応は、地域によってさまざまで、その展開の背後には、自然条件と入植・開発プロセス、さらには土地政策・測量を実施した人々の個性が強く反映していたことを指摘している。

本論の最終章ともいべき第6章：「南オーストラリア植民地の方格プラン」では、これまでの事例地域とは全く異なる理念によって開かれた、南オーストラリアの具体的な開発プロセスの概要と、地域によって違うさまざまな規格の方格プランとについて、当時の土地政策と関連づけながら、詳細な検討が加えられている。

最後の「終章」は、本書全体のまとめともいべき部分で、オーストラリアの開拓に際して設立された6カ所の旧植民地における、方格プラン導入の背景ないしその理由、さらには、設定・実施されたさまざまな方格プランとそれらの特性について要約している。

以上、各章ごとに、それぞれの内容のあらましを通覧してきた訳であるが、全体的な特色としては、方格プランにまつわる非常に詳細な事実経過が復原されていることである。忠実に復原されたこれら過去の事実関係は、今後、オーストラリア研究をめざす者にとって、不可欠の情報となっていくに違いない。

そのことは、また本書に掲載された図の大半を占める「生の一次史料」についても、いえることである。本書の本文中には、全部で73枚の図が挿入されているが、そのうちの約70%は、開拓時代初期の測量図や、その後の地形図等をそのまま掲載したものである。これは、一見オリジナルな図が少ないという印象につながりかねないが、著者の意図する中心は、さしあたりそうした図（史料）そのものの分析にあるのではなく、むしろ、図（史料）に見られるような土地区画が、どのようにして導入され実施されるに至ったか、という点にあることを見逃しては

ならない。史料は、あくまで「生」でなければならぬのである。また、これら「生の史料」は、冒頭においても触れたように、同時に、これまで不足していたオーストラリアに関する情報の、直接的な紹介を兼ねていることにもなる。

最後に、評者の一方的な希望をひとこと述べさせていただくと、方格プランの導入や実施に際し、その背後にあって、おそらく必然的な影響力をもっていたと考えられる自然条件を、もう少し具体的に対応させていただきかけた点である。開拓初期の段階はいうまでもなく、開拓のプロセスには、常に自然的な条件が大きく左右していたことは、気候や土壌、さらにはそれらを反映する植生などに関する当時の記録から、明らかである。ヨーロッパ人入植以前の状況を、なお多く残すといわれるクイーンズランド州や西オーストラリア州の北部、さらには北部地域などに展開する、あまりにも巨大な自然景観を目にした時、こうした思いは一層深まっていくことになる。

いずれにしても、著者の歴史地理学に関する素養は、わが国の条里制や古代・中世村落にかかわる一連の研究によって、衆目が一致して認めるところである。そうした手がたい手法によってつらぬかれた本書は、オーストラリア研究者や、これからそれを目ざそうとしている者にとって、必読の書となるであろう。また1988年には、オーストラリア（シドニー）でIGCの大会が予定されている。これを機会に、約200年間にわたって、この巨大な大陸の開拓に挑み続けてきたオーストラリア人の底知れぬエネルギーと、その歴大な背景を垣間見ようとする者にとっても、本書はかけがえのない一冊となるに違いない。（片平博文）

高木勇夫著 条里地域の自然環境：古今書院、

1985年、A5判、238頁、3,000円

本書は次の5つの章で構成されている。

第I章 地形地理学あるいは地理的地形学の視点  
(pp. 7~12)

第II章 自然的基盤としての沖積低地の地形(pp. 13~57)

第III章 盆地の条里地域と自然環境(pp.58~100)

第IV章 沖積平野の条里地域と自然環境 (pp. 101~183)

第V章 耕地開発をつらぬくもの (pp. 184~222)

第I章では、地形研究の進展の方向についての整理の上に立って、「何よりも重要な課題は、体系的な地形ないし土地の分類システムを確立し、それにしがった地形(土地)の空間的な配置状況の客観的把握を容易にすることである」とし、本書が「地理的地形学」の立場に立脚していることを明示している。

第II章では、まず「沖積低地の堆積システム概念図」を提示し、従来の地形分類が「盆地・沖積平野という一つの河川流域に配置する低地を貫く視点が欠除している」と指摘している。その上で、盆地と沖積低地の微地形を検討して、それぞれの「地形配列と微地形の組み合わせ」を模式図と表の両方で提示する。さらに、沖積面分類についても、研究史と各地方の分布状況を概観し、沖積面を「①完新世海進の海面高頂期における高位海水準面を基準面として形成された沖積面、②海面高頂期以降、現海水準に到達するまでの間に、一時的に停滞した海水準を基準面として形成された沖積面、③現在の海水準を基準面として、現在形成されつつある沖積面」の3面に大別している。

第III章では、甲府盆地と亀岡盆地について、第IV章では、河内平野、久慈川・那珂川下流平野、足柄平野について、それぞれ「条里型土地割」の分布と地形について検討が加えられている。「盆地の条里地域」を検討する際には、「上田(洋行, 1968, 地評41)と降旗(由起子, 1979, 人文地理31)の報告が地形と条里型土地割との関係を検討しているにもかかわらず、そこで取り扱われている地形は中地形であったり、小地形であったり、ときに微地形であったりして、取り扱っている地形に一貫性が認められない」と指摘し、また「沖積平野の条里地域」についても、「条里型土地割と地形との間に、どのような秩序が成立しているかという点に関しては、十分に検討されているとはいいがたい」と述べる。従って、第2章で提示された「地形配列と微地形の組み合わせ」および3つの沖積面分類をその基礎として、このような点を明確にすべく事例研究が進められている。第III章では、甲府盆地の「条里型土地割」の分布から見て、「古代の耕地開発」が「平坦で、用水の確保が容易な泥流舌状地や出口を扇状地に閉塞された氾濫盆地地であったり、稀には自然堤防上であったりしたのであろう」とし、これに対し

亀岡盆地では、「河川氾濫の影響を直接受けたり、わずかに分布する粗粒な堆積物のある土地を除けば、氾濫原や台地はもちろんのこと、山麓部にみられる麓屑斜面にまで条里型土地割が施されて」いることが詳説されている。第IV章の3つの事例はそれぞれ「地盤沈降地域、地盤中性地域、地盤隆起地域」の例として位置付けられており、後2者では沖積面が明瞭に段化しているが、最前者にはそれが認められないこと、「これら3地域における沖積地と条里型土地割分布の間にみられる一般的特徴は、条里型土地割は沖積I面と沖積II面に分布するが、沖積III面には分布しないこと」などが指摘されている。

第V章は、第III・IV章の立場を「微視的」と位置付け、「巨視的な立場にたつて、日本全域を対象にした条里型土地割の分布とその成立基盤について」検討を加えたものであるが、そこでは同時に、「記紀にみられる耕地開発、新田開発・耕地整理などが包括的にとりあげられて、最終節「耕地開発と自然的構造」によって結ばれている。

以上のように、本書は「地理的地形学(地形地理学)」の立場から、「地形配列と微地形の組み合わせ」や沖積面分類を明確化し、それを基礎としつつ、「条里型土地割」の分布地と非分布地、ならびにそれらの土壌型との対比から、「耕地開発と自然的構造」の全貌にせまろうとする大きな構想を有するものである。巻末の「参考文献」欄に掲げられた既発表の6論文が基本となっているようであるが、論文集としてではなく、上記のような構想の下に新しく書きおろされた形となっている。第II章で提示された「地形配列と微地形の組み合わせ」および沖積面分類の整理、第III・IV章冒頭で指摘された従来の条里地割の分布研究の問題点を克服した事例研究など、本書は多くの貴重な新知見を有効に提示しているといえよう。とりわけ、全編を貫く簡潔な文体は、95に達する豊富な図版(1図が複数の地図からなるものがあるから、実数はさらに多い)と共に、本書をたいへん印象的なものとすることに成功している。

ところが、本書のタイトルとして使用されている「条里地域」、あるいは第III章以下の記述の重要な指標となっている「条里型土地割」などについての著者の見解が整理された形で提示されていないのが、やや唐突な印象を与える。タイトルとはしがき部分を除けば、第I・II章の地形用語・概念などの整理のあと、第III章において事例の記述が直接展開され

ている。条里の研究史における大きな振幅からすれば、どのように、あるいはどのような幅をもたせて「条里地域」ないしは「条里型土地割」を把握するのかについて明確にしておくことが不可欠であろう。「あえて発達史的な観点から、埋没条里や絶対年代などについて取り扱っていない」とはしがきに記されているが、例えば「このような土地区画にみられる地域的な差異は、政治権力の中核地域からの距離的な違い、すなわち大和朝廷の支配力、調達し得る労働力量、備蓄労働用具、投下し得る技術力の差を反映している」(p.183)、といった解釈などにみられるように、現在の地表の地割形態の起源を随所で律令時代のごく初期に限定して考えられているようである。条里地割をこのように標準化石的に使用する伝統的な手法には、現在の知見からすれば様々な留保条件が必要であり、せつかくの魅力的な記述の中ではいかにも惜しいと思われる。

歴史地理学的史料ないし歴史的史料の扱いについても、比較的古い見解に拠って記述されているように思われるのも残念なところである。例えば、「倭名類聚抄」と「拾芥抄」の田積の差が、そのまま10世紀前半と室町時代初期の400年間の開発を示す(p.200)とされるのも、史料的にはすでに根拠を失った考え方であろう(弥永貞三(1966):拾芥抄及び海東諸国紀にあらわれた諸国の田積史料に関する覚書、『名古屋大学文学部研究論集』41)。

しかし、これらはむしろ歴史地理学自体の責任であるとするべきかも知れない。ただ、例えば「河内平野の条里型土地割については……詳しい分布範囲が明らかになっているわけではない」、とされているような点については、すでに平野全域の分布と現・旧河道の対比を示した図(服部昌之<1978>:大阪平野低地古代景観の基礎的研究,藤岡謙二郎先生退官記念事業会編『歴史地理研究と都市研究』上)や平野南部の詳細な条里地割分布図(足利健亮<1982>:大阪平野南部の古道について、『人文』28)が作製・公表されているから、これらを援用していただければ、論旨がさらに精緻化されたと思われる。

「地形地理学の立場」から著された本書を、このように歴史地理学の側から一面的にとりあげるのは、著者に対して大変失礼なことであり、お詫び申し上げねばならない。しかし本書は、歴史地理学の側面からも大きな意義を有するものであり、とりわけ第Ⅲ・Ⅳ章における地形面と条里地割分布との対比は重要な成果である。

はしがきに記されているように、次に予定されている「埋没条里や絶対年代」などを織り込んだ研究が公表されるのを待ちたい。本書に示された構想は著者のみならず歴史地理学にとっても重要な起点となるものであり、その進展に大きな期待が寄せられるところである。(金田章裕)